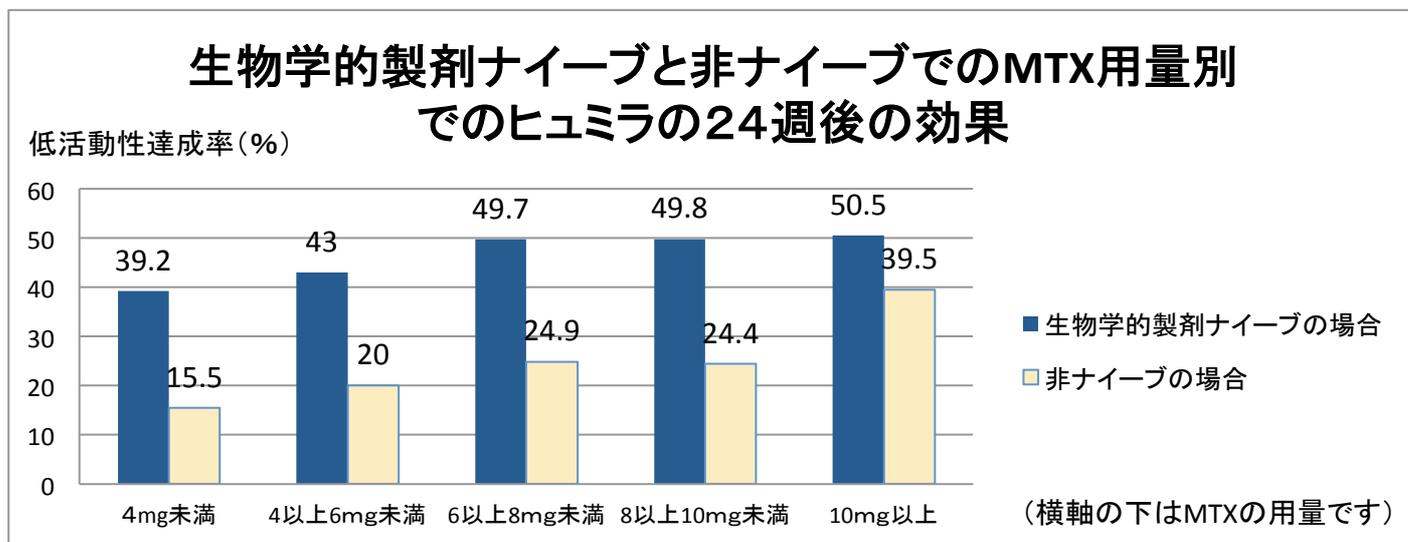


2015年日本リウマチ学会ハイライト

今年のリウマチ学会は4/23から25日まで、名古屋市で開催されました。リウマチ膠原病領域の研究・臨床は毎年進歩しています。関節リウマチや他の膠原病に対するいくつかの新しい薬剤の臨床治験も進行しており、今後もそれらの成果が期待されます。今回はいくつかの興味深い発表をご報告します。

1. ヒュミラ（抗TNF抗体製剤）と併用するMTX用量別の効果の比較（MELODY試験）（NTT東日本札幌病院 小池先生）

日本人のリウマチ患者さん7740名を対象とした全例調査に基づいた、後ろ向き調査の発表です。DAS28(ESR)（疾患活動性の指標で、3.2未満なら低疾患活動性です）を、MTXの用量から5群（①：0mg超4mg未満 ②：4mg以上6mg未満 ③6mg以上8mg未満 ④：8mg以上10mg未満 ⑤：10mg以上）で比較しました。24週後に低疾患活動性に到達した患者さんの割合を、生物学的製剤ナীব（初めて使用）の場合と非ナীব（2剤目以後の使用）の場合に分けて報告しました。下の図の縦軸はDAS28(ESR)の低疾患活動性を達成した患者さんの割合（%）を示しています。

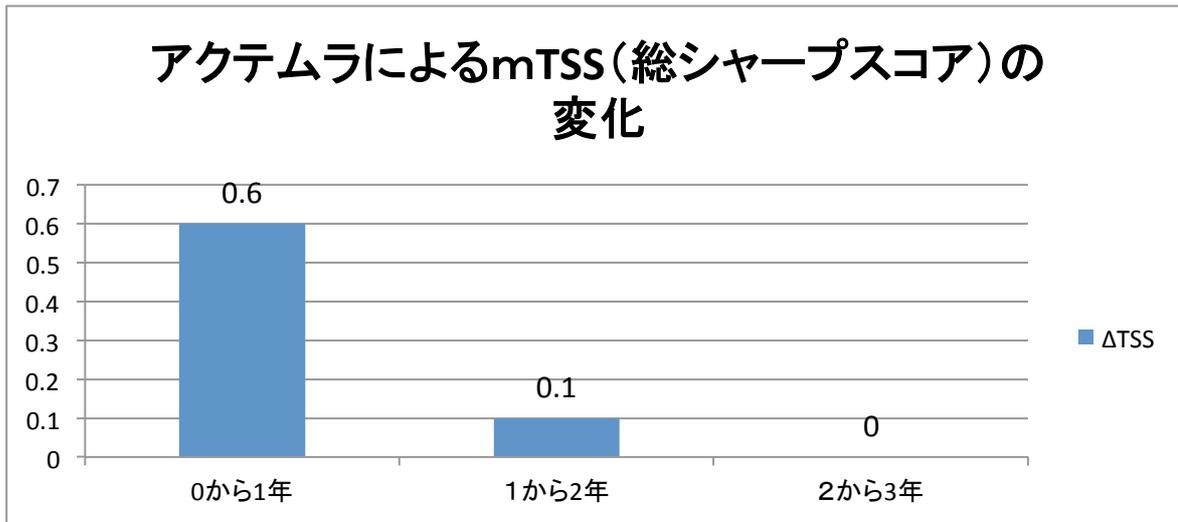


生物学的製剤ナীবの場合では、MTXの用量は6-8mgで十分で、それ以上増やしても効果は頭打ちでした。しかし、非ナীবの場合ではMTXは10mg以上の併用が効果良好でした。すなわち、生物学的製剤ナীবの場合では併用するMTXは比較的少量で十分でしたが、非ナীবの場合には十分量のMTXを併用する必要があるとのことでした。MTXは使用量が増えるほど副作用も多くなる傾向があるため、使用量が少なくても済めば患者さんの体に対する負担も少なくなります。

2. アクテムラ（抗IL-6レセプター抗体）治療の3年間の長期観察調査（光が丘スペルマン病院 平林先生）

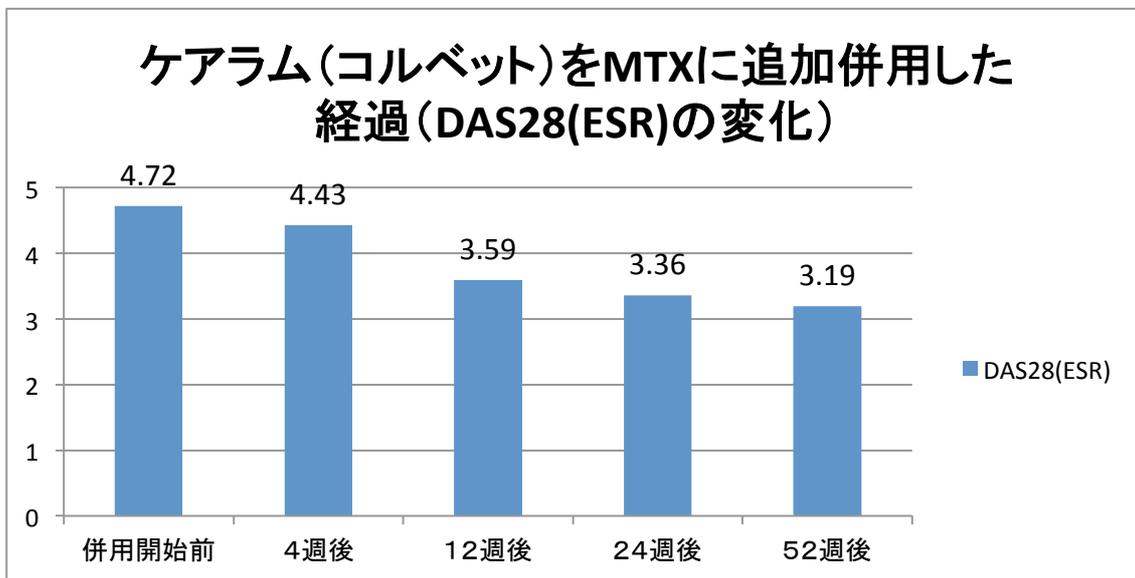
アクテムラで治療中の724名の患者さんを3年間観察しました。その内の50名で関節破壊の進行をmTSS（総シャープスコア）というレントゲン写真による方法で評価しました。（このスコアの1年間の

変化が0.5未満を構造的寛解といいます。)下の図の様に、最初の1年間より、2年目、3年目で継続的に関節破壊のスピードが弱まり、3年目ではゼロ(進行が止まった)という素晴らしい結果でした。継続的な使用で関節破壊阻止効果が増強する、との発表でした。



3. MTX 効果不十分のリウマチ患者さんに対するケアラム(コルベットと同一)錠の追加併用(豊橋厚生病院 金山先生)

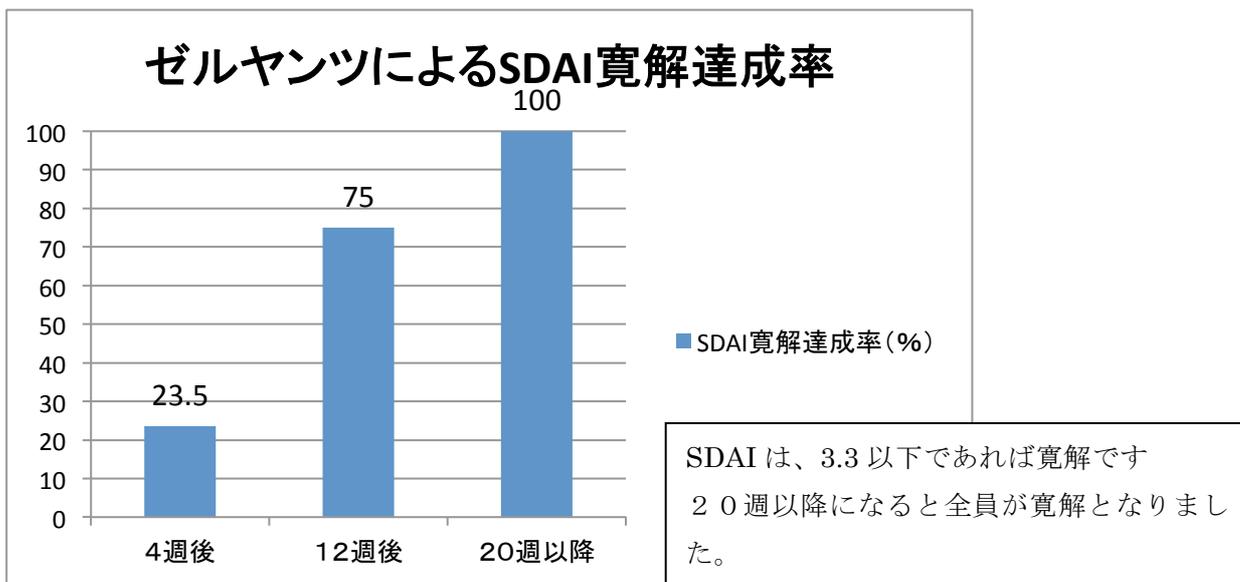
2012年に発売されたケアラム(コルベット)は単独使用でも有用ですが、MTXや生物学的製剤に併用すると効果が増強する内服薬です。この発表ではMTX(平均9.8mg/週)でも効果不十分の患者さん41名にこの薬剤を52週併用した結果が報告されました。下の図にDAS28の経過が示されています。ケアラム併用開始4週後から有意にDAS28が改善しています。



この薬剤は生物学的製剤より遥かに安価で、MTXや生物学的製剤が効果不十分な場合に併用薬として有望とされています(単独使用でも、もちろん有効です)。

4. ゼルヤンツ(JAK阻害薬)の使用経験(横浜南共済病院 井畑先生)

昨年の「かわら版」でご説明した、生物学的製剤と同等に効果が高い分子標的薬である JAK 阻害薬ゼルヤンツの報告も数多くなされました。この発表では、23名の患者さんへの使用経験が報告されました。下の図に SDAI という、DAS28 よりも厳格な寛解基準を満たした患者さんの割合が示されています。



ゼルヤンツの開始量は、5mgが9名、10mg（常用量）が14名でした。当初MTXは83.6%の患者さんに平均11.8mg使用されており、ステロイドは34.8%の患者さんに平均5.6mg使用されていました。経過を通してステロイドは開始時の37%に減少したとのことでした。使用中止は3名（効果不十分1名、副作用中止が2名）でした。効果不十分による中止が1名しかいなかった、というのは、この薬剤が非常に効果が高いことを示していると思われまます。

5. オレンシア（T細胞選択的共刺激調節薬；CTLA4Ig）は間質性肺疾患があるリウマチ患者さんにも安全に使用できる（亀田メディカルセンター 中下先生）

生物学的製剤の一つオレンシアは、他の生物学的製剤に比べて重篤な感染症の頻度が少ない傾向があり、高齢者や体力の低下したリウマチ患者さんにも比較的使用しやすいとされています。一方、ごく稀ですが、生物学的製剤を使用中に間質性肺疾患が悪化することがあります。この発表では、18名の間質性肺疾患がある患者さんにオレンシアを1年間以上使用し、前後でCTを撮影し比較しました。その結果、全例とも間質性肺疾患の悪化は見られなかったとのことでした。症例数を増やしての検討が必要であるものの、オレンシアは間質性肺疾患がある患者さんに使用しやすいことが示唆されました。